

# チベット語天祝方言とその言語使用状況について

別所裕介, 海老原志穂

## はじめに

中国国内におけるチベット語は、大きく、中央、カム、アムドに分かれる。今回扱う、天祝方言<sup>1</sup>は、そのうちのアムド・チベット語に属する。天祝方言が使用されている甘粛省天祝チベット族自治州は中国で最初にできた自治県である。天祝チベット族自治州は、アムド諸地域の中でもっとも東北寄りに位置し、常に漢族との接触にさらされてきた。現在では、標高の低い地域において、特に漢化が進んでおり、天祝方言話者は減少の一途をたどっている。しかし、この天祝方言はアムド・チベット語の中でも独特の特性を有する方言であり、音韻や語彙、助動詞などにおいて他の地域にはみられない特徴を持っていることがこれまでも報告されている。

本稿では、天祝方言の置かれている社会的な背景（天祝チベット族自治州における、1 歴史と地理、2 民族分布、3 天祝方言の使用状況：別所）と、言語自体に関する事実（4 天祝方言に関する先行研究、5 音韻概説：海老原）をまとめる。

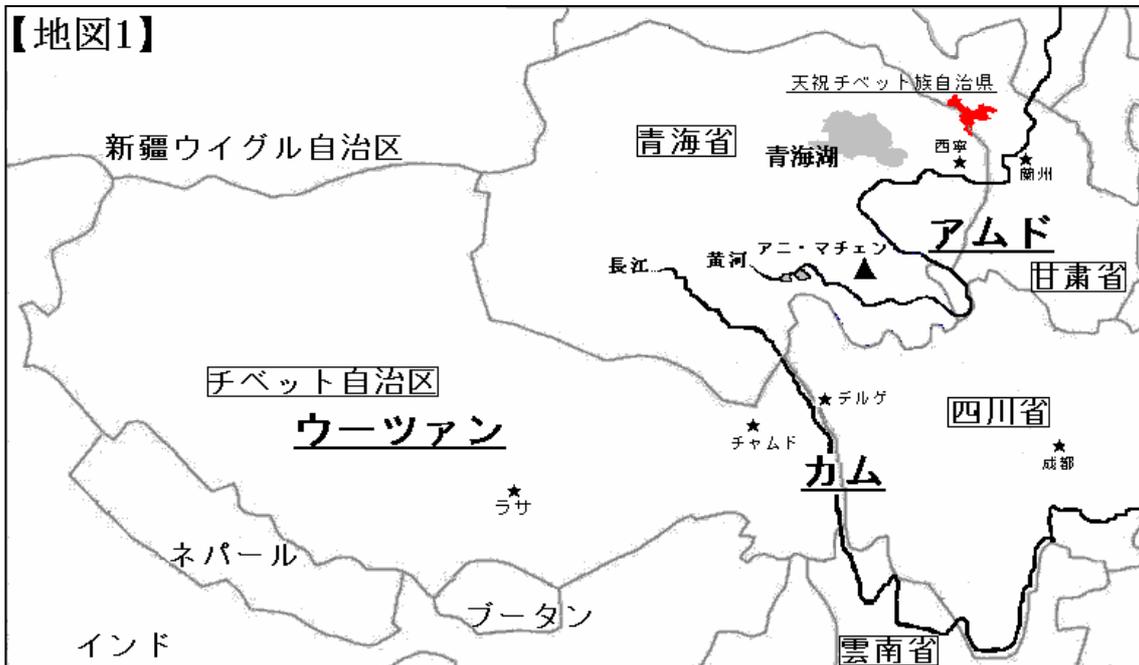
## 1 歴史と地理

本稿で取り上げる天祝方言は、アムド・チベット語の下位方言のひとつである。前近代までのチベットの地域区分において「ホワリ」(*dpa'ris*) と呼称される区域に暮らす部族民が使用する言語である。ホワリとはチベット語で「英雄の地」といったような意味であり、この地に住むチベット族「ホワリワ」（「ホワリの人」の意）は、古代チベットの統一王朝である吐蕃が唐朝との国境に送り込んだ辺境防備軍の末裔とされている（Wang 1998 : 183）。

今日、ホワリは「アムド」（東北チベット）と呼ばれる地域に属する（【地図1】参照）。アムドは、「ウーツァン」（中央チベット）、「カム」（東チベット）と合わせて「チョルカ・スム」と総称されるチベット族の三大居住区のひとつであり、青蔵高原の東北角、黄河上流部の大部分を占めている。

---

<sup>1</sup> チベット語では、ホワリ [h<sup>w</sup>Λri] (*dpa'ris*) と呼ばれる。斜体はワイリー方式によるチベット文字のローマ字転写である。



ホワリはそのアムドを構成する諸地域の中で最も河西回廊寄りに位置し、漢族との文化接触の最前線に置かれてきた。現行の行政区分では特に「天祝チベット族自治県」(以下、「天祝県」)と呼ばれる地域がこれに該当するとされる。

しかし、前近代までのホワリワの居住領域はこれよりもずっと広く、大通河流域の広い範囲(今日の青海省の互助や大通、門源、楽都、および甘粛省の永登などを含む。地名に関しては【地図2】を参照していただきたい)に及んでいた。このため、天祝方言は天祝県の境域をはずれた周辺地域でも小規模ながら使用されている。しかし本稿では、天祝方言の使用状況の判断材料としては、その範囲を今日の天祝県内に絞って論じることとする。

## 2 民族分布

天祝県を含むこのあたりの地域は、チベット族にとってのメインランドである青蔵高原がその高原的特徴を弱め、砂漠型の気候へと変転していく領界である。したがって、そこに暮らす人々の構成も多民族社会の様相を呈している。最新の国勢調査(2000年)によると、天祝県の総人口221,347人中に占める民族籍の比率は、以下の表1のようである。

表 1 天祝県の民族人口（『甘肅省 2000 年人口普查資料』上冊 124-183）

民族	人口	比率
漢族	139,190人	62.88%
チベット族	66,125人	29.87%
土族	12,633人	5.71%
回族	1,986人	0.9%
モンゴル族	961人	0.43%
満族	213人	0.1%
その他	239人	0.11%

## 2.1 各民族分布の概況

最初に、チベット族以外の民族分布（満族とその他の民族は除く）について述べる。

全人口の6割強を占める漢族は、その多くが清朝末期から民国期にかけて、陝西省や青海省北部などから戦乱を避けて移住してきた人々である。彼らの大部分は標高2,000m以下の低地に農地を開拓し、県政府所在地である「華蔵寺」を中心として県東部および北部、さらに大通河両岸に多く居住している。



喬高才讓主編（2004）所載の地図を元に作成

一方、土族は、大通河西岸地域（今日の青海省互助土族自治県）から、20世紀初頭のムスリム軍閥<sup>2</sup>の圧迫を逃れてきた流民であり、大通河の東岸地域に集中

<sup>2</sup> イスラム教徒の軍閥，馬氏一族。民国時代に青海省で権力を握った。

して居住している。言語は土語というモンゴル系の言葉であるが、故地に著名なチベット仏教寺院である佑寧寺（グンルン・ゴンパ）を擁していたため、現在でもチベット仏教に親和性が強い。

回族はその大部分が青海省の大通などの集住地域から来た商業民であり、特に都市部において飲食業や物流業に従事している。

モンゴル族は県東部に集中しており、彼ら自身は元朝期のモンゴル王侯の末裔を名乗っている。しかし、言語、生活習慣ともにモンゴルの要素はほぼ消滅しており、漢族と見分けがつかないほどに漢化が進んでいる。

こうした民族の雑居状態の中で、チベット族は全体の約3割の人口を維持し、漢族に次ぐ人口を有する。しかし、彼らのすべてが本来の意味でのホワリワに属するわけではない。チベット族として認定された人々は県全域の、特に標高2,000m以上の高地に分散して居住しているが、この内、県東部に住むのは「ワイエンバ」と呼ばれるチベット族である。ワイエンバとは、天祝県に移住して来た、青海省海東地区の化隆県出身のチベット族である。ワイエンバはホワリワの対立項としてしばしば持ち出される概念である。ネイティブのホワリワにとってはよそ者として認知されている。彼らの話す言葉（ワイエン方言）もまた天祝方言の対立項となっている。年配のホワリワの口からは、自分たちの美しく伝統的な言葉に比べ、崩れて聞き苦しい言葉、としてしばしば批判的な言及がなされる。

## 2.2 「偽チベット族」と民族識別

またこの他、天祝県内には統計上は「チベット族」として数えられながらも、その実態において漢族と区別がつかない集団が存在する。ある県幹部によると、表1の統計にあがっているチベット族全体の3割から4割、つまり少なくとも見積もっても2万2千人程度の住人が、現地で「偽チベット族」（假蔵民）と呼ばれている。この「偽チベット族」の категорияに該当するのは、言語、文化習慣、先祖の出身地など、あらゆる要件において明らかに漢族の特性を有し、自他ともにそれを認めながら、50年代に国家が行った民族識別工作において、なぜかチベット族として戸籍登録された人々である。

周囲から偽チベット族と認知されている彼ら自身にこのことを訊ねると、多くの人が「おばあさんがチベット族だった」「ひいおじいさんが…」という風に、自分がクォーターか、さらに八分の一の割合でチベット族の血を受け継ぐ人間であると主張する。実際に、役人が民族籍確定のために調査を行ったときもそのようにして申告し、その申し出はそのまま受理されたという。

彼ら偽チベット族の大半は、特に華蔵寺近隣の谷あいには自分たちの集落を形

成して、農耕を営んでいる。そのような谷は、周囲のチベット族集落からは「漢人の谷」とみなされている。チベット族籍を主張しているのは本人たちのみで、周囲ではその虚偽性を知悉している点が際立って特徴的である。実際、彼らはチベット語は全く解さず、名前も漢族の姓名しか持たない。

「民族区域自治政策」を施行している中国の民族自治州・自治県において、マジョリティーからマイノリティーへの帰属変更を行うことは、自治政府が定める優遇政策の恩恵に与れることを意味する。例えば、子供を2人もうけることができる。進学や就職の際には優先権が与えられる。年配の人々によると、50年代末から政策の失敗で食料が不足し、生活は困窮したが、チベット族は漢族よりも配給を少し多めに受けられたという。こうしたいくつかの政策上の利益を享受するため、共産党が行った民族識別初期における特有の混乱に乗じてチベット族になりすました人々がいたことは、この地域において半ば暗黙の了解のようになっている。

こうした民族識別上の事実誤認がそのまま放置されている状況は、青海省やチベット自治区など、多民族との共存領域が限られている他のチベット族地域に比べて特異であり、古くから漢民族との接触の最前線に位置してきた天祝県独自の民族状況を生み出している。

### 3 天祝方言の使用状況

#### 3.1 使用地理分布

言語使用をめぐる地理状況としては、山地と低地の区分が重要である。多くのチベット地域同様、ホワリの地勢は山がちであり、居住領域は河川に沿って開けた峡谷ごとに区切られている。各峡谷では河岸段丘の斜面を利用して、主に氏族グループごとにまとまって集合的な居住区が築かれており、周辺の可耕地には麦や豆などが栽培されている。しかし、この地域における農地の開墾は、戦乱によって漢族の大量移住が続いた清朝末期から民国期にかけて、つまりこの150年ほどの間に集中して行われたものであり、元来ホワリの生業はヤクと羊を主体とする純粋牧畜であった。

このため、漢族などの外来民族が低地を好み、灌漑によって耕作を行うのに対し、伝統的なホワリは牧畜を重視した。特に県西部に広がる牧畜に適した草原であるタシ・シューロンや大通河右岸の山岳地帯においてその独自の民族文化がよく残されている。そのため、一般に標高が高ければ高いほど、牧畜語彙を中核とする天祝方言の使用環境が維持されている傾向が見出せる。

### 3.2 家庭での使用状況

1958年の大躍進期から文革期に学齡期を迎えた現在40～50代の青・壮年層は漢語(甘肅方言)を生活言語としている。チベット語での会話がおぼつかない人々は特にこの年齢層に集中している。男性に比べ、家の中で老年層と接する機会の多い同世代の女性はチベット語に対して一定の理解能力を持つが、それでも聞き取ることができる程度で、十分な会話能力を持たないこともしばしばである。若年層は学校教育によってチベット文字・文法を習得しているが、これは青海省北部や甘肅省甘南地方のチベット語を基準とした標準的なアムド・チベット語であり、地域独自の天祝方言が特に意識的に擁護される傾向は今のところみあたらない。

一家の大黒柱に当たる年齢層が漢語以外の言語に通じないため、家庭生活では一般に漢語が使用される傾向にあり、チベット族子弟が学校で習うチベット語は家庭内で生きた言葉として結実しない。ちょうど日本人が学校で学ぶ英語と同じように、受験用の非実用的なものに終わっている。このような言語使用状況から、ホワリ出身の学生は民族大学などに進学しても、当初は満足にチベット語を操ることができず、他地域のアムド・チベット族からは幾分差別的な目でみられるという。

以上のように、ホワリ地域の多くの世帯で世代間の言語的断絶が観察される。老年層と若年層の間に挟まれた文革世代はチベット語の使用においては谷間に位置しており、特に民族意識の高い家庭<sup>3</sup>でもない限り、一般に家庭内ではチベット語の使用頻度が低い。老年層と若年層では標準的なアムド・チベット語によるコミュニケーションが成立するが、老年層が天祝方言本来の語彙を盛り込んで会話を構成するのに対し、若年層の側では学校で習った汎用性の高い文語の語彙を多用する。そのため、同じチベット語で会話をしても、互いの意思疎通に齟齬が生じる局面もみられる。また、出稼ぎや就職などで華蔵寺をはじめとする都市部に移住した世帯は核家族の形態を取ることが多く、新旧世代が同居する農村部に比べて漢語の使用がより支配的である。

### 3.3 公的使用状況

天祝方言の公的な使用状況に関しては、§3.3.1 宗教レベルと§3.3.2 政治レベルにわけて述べる。

---

<sup>3</sup> このような意識の度合いは、チベット仏教など、言語以外の文化領域への親密度に連動すると思われる。例えば家族の中から転生活仏を出したり、地域コミュニティで作る宗教施設の世話役を勤めたりするような人物がいる世帯では、日常的にもチベット語の使用頻度が高くなる傾向が見られる。

### 3.3.1 宗教レベル

ホワリ地域で圧倒的な勢力を誇るのはチベット仏教のゲルク派である。現在天祝県下には主だったもので15座の僧院が活動しているが、そのすべてがゲルク派教団に属している。こうした教団が主催して行う宗教儀礼においては、経典などから取られるユニバーサルなチベット文語（仏教用語）が主体であり、方言使用と直接にリンクする局面は少ない。ごく少数であるが、法事に用いる特殊な宗教用具の作製において、その材料となる植物の名前などが天祝方言の語彙でやりとりされることがあり、こうした言葉は比較的多くの人に認知され、漢語の中にも混入して使用される語彙となっている。しかし全体としては、宗教的集いの場において天祝方言が使用される余地はますます狭まっていると考えられる。例えば、現在、天祝県内で最大の規模と影響力を持ち、県内のチベット族が一堂に会する機会がみられる天堂寺（チョルテンタン・ゴンパ）の場合でも、高僧による法話などの場面において天祝方言が積極的な意義を付与されることはない。むしろ昨今の西部大開発に伴うチベット密教ブームや観光ブームによって漢族の来訪が増えているため、僧院側ではチベット語とともに漢語をバイリンガルで使用する場面が増えている。

### 3.3.2 政治レベル

「チベット族自治県」という名目上、自治の主体はチベット族であり、県政府や政治協商会議などの政策決定機関においてはチベット族幹部が一定の議席数を常に保持している<sup>4</sup>。自治の主体でありながらも、県内ではチベット族住民は少数派であり、郷・鎮各級政府および村委会などの政治機構においてもチベット族成員は半数に満たない場合がほとんどである。そのため、特に村落レベルの運営会議や党支部委員会などのローカルな行政機構では必然的に全員共通の言語として漢語が選択されている。また、個別の村落においてチベット族の構成員のみが集まって自主的に行う共同作業や会合などの場面でも、活動の中核を担う青・壮年層がチベット語自体に不自由なため、議事進行や意見交換は漢語を中心として進められ、チベット語はほとんど使われない。筆者はかつて天堂寺近隣のある村で開かれた、新しいチベット式仏塔の建立とその財務処理をめぐる地元チベット族指導層による会合の場に居合わせたことがある。そこでも、一連の重要な取り決めについて全員の明確な合意を形成するため、漢語を用いて討議が行われ、決議文も漢語で筆記されていた。

---

<sup>4</sup> 現行の「民族区域自治法」では、自治単位のトップに少数民族幹部を置くことなどが定められている。

### 3.4 天祝方言の言語使用人口

天祝県内の言語使用状況に詳しいある元県幹部によると、天祝方言の日常的な使用者は現在およそ2万人であるという。また県東部の松山、東大灘、西大灘各郷に集中して居住するワイエン方言の使用者は概算で1万人近くに上る。一方、県内のチベット族人口のうち最低2万人強はチベット語をまったく話せない「偽チベット族」と考えられ、彼らは県政府所在地の華蔵寺を中心としてその近郊に集中して居住している。ここから、県北部および西部に天祝方言話者の大部分が居住していることが導き出せる。このことは、これらの地域が県東部に比べて地勢的・自然環境的により牧畜に適しており、ヤクを主体とした放牧が今でも盛んに行われていることと無関係ではない。

一方、「偽チベット族」でもワイエンバでもない、残りの1万数千人のチベット族の大部分は、文革期に言語習得の機会を失った、40～50代の「谷間」の年齢層に属する人々、あるいは、非チベット系の民族（特に漢族）と通婚した親から生まれたハーフのチベット族である。特に後者の場合、民族籍だけをチベット族として選び、漢族と同等の教育環境・生活様式になじんできた人々が多く、チベット語のリテラシー獲得の必要性からは切り離されている。

天祝方言話者人口およそ2万人という数字についても、その内実にはさまざまな位相があるようである。牧畜が盛んな地域に暮らしかつ、70歳以上の話者には、十分な方言使用能力を持った人が多い。しかし、これよりも年齢が下がるとその正確さに遜色がみられるようである。事実、同じ村の中でも、70歳以上の話者からは、自分よりひとつ下の世代が話す言葉について、「ワイエンバのような言葉づかい」や「ラプラン地方（甘肅省甘南地方の地名）の言葉に染まっている」と批判的な意見が聞かれる。

このように、十全な会話能力をもった天祝方言話者の数は2万人から、さらに限定されてくるようである。県西部の天堂郷に属する3つの村（チュチャ村、コルタン・ゴンマ村、コルタン・シュグマ村）を例として挙げてみると、これらの各村において十分に天祝方言の使用能力を持つと自他共に認める人物はそれぞれ10人前後しか数え上げることができなかった。この3村のチベット族人口の合計はおよそ400人であるので、十分に天祝方言の使用能力をもつ人の割合は、全体の7.5%ほどにとどまることになる。これらの話者はすべて70歳以上の高齢者であり、本節前半で述べたように青・壮年層との間に言語的断絶が広く観察されることを考えれば、今後天祝方言が衰亡の危機に追い込まれていくことは確実である。

#### 4 天祝方言に関する先行研究

天祝方言に関する研究は少数ではあるが存在する。天祝方言に関する主な先行研究をここに紹介する。

天祝方言に関する記述は、最も古いものでは、Prejevalsky (1875) がある。ロシア人探検家Prejevalsky 率いる調査隊は1870年から1873年の間、地理学、民族学的研究の目的で東アジア各地を調査、探検した。モンゴルから南下して来た彼らは、現在の天祝県、天堂寺から互助県、劫蔵寺 (チュブザン・ゴンパ) のあたりでチベット語 (Prejevalsky 自身は「Tangut<sup>5</sup>の言葉」と呼んでいる) の語彙の記述を行っている。そのリストとして収録されている語彙がほぼ、現在の天祝方言と一致することから、彼らの記録した言語は、現在の天祝方言の系譜に連なる性質のものであると考えられる。なお、大通河に面する天堂寺付近には、いまだに天祝方言話者が存在する。しかし、劫蔵寺付近の大部分のホワリワは民国時代にムスリム軍閥の行った民族政策により、門源などの地域に移住を強いられたという歴史をもつ。現在、劫蔵寺付近はチベット族自体が少なく、チベット族であってもチベット語を解さないもの、青海省のアムド・チベット語をもちいているものがほとんどであり、天祝方言はほとんど使用されていないようである。

Hermanns (1952) は、天祝方言に関する簡単な音韻記述を行っている。彼は、アムド・チベット語には遊牧民の言葉と農民の言葉があると説明した上で、天祝方言については、青海湖 (Kukunor)、南マチュ、ラプラン、チョネ、ゴロク、アリの言葉とともに、遊牧民の言葉に属すると位置づけている。

現代の天祝方言に関する言語記述としては、華・馬 (1992)、馬 (1994) がある。華・馬 (1992) は天祝方言の音韻を扱っている。チベット文語と天祝方言の音韻を比較し、対応規則を明らかにしている。馬 (1994) は、他のアムド・チベット語と対照した場合の天祝方言独自の特徴を、音韻、語彙、文法にわけて述べている。語彙に関しては、指小辞の *-mök (mug)*, *-ri (re'u)* の使用や、親族名称にみられる特徴を述べている。助動詞における特徴としては、「進行」を表す助動詞 *=to (do)*, *=k<sup>h</sup>ahnaj (gi snang)*, 「結果状態」を表す助動詞 *=hnaj (snang)*, 「過去」を表す助動詞の *=le (le)*, *=tanle (tang le)* の使用について述べている。

---

<sup>5</sup> Tangut (タングート) は一般的に「西夏」の主要民族である党項族を指すのに用いられる用語である。しかし、Dunnell (1996: xiii 拙訳による) は「[Tangut という単語は] 西洋人 (特にロシア人) の間では、中国とチベットの境界の民族言語的態度において、北方アジア的な要素を指すものとして一般的になった」と述べている。このDunnellによる記述からもわかるように、当時、当該地域付近に居住していたアムドのチベット族をTangutと呼ぶことは珍しいことではなかったようである。

## 5 音韻概説

華・馬 (1992) を参考にし, 2006 年 9 月に筆者は天祝県において調査<sup>6</sup>を行った. 調査協力者は天祝方言母語話者である女性 (2006 年当時で 78 歳) である. 氏は天祝県天堂郷内のチュチャ村 (§ 3.4 も参照のこと) 出身である. チュチャ村は, 天祝県西部を流れる大通河に向かって開けた代表的な半農半牧村であり, 河の対岸は青海省互助土族自治県の北山郷である (【地図 2】参照). 音韻に関する調査の結果を以下にまとめる. 先行研究と本稿の記述の間には細かな異同がみられた. その異同の詳細については別稿に譲ることとし, 本稿においては, 筆者の調査結果のみを提示する.

天祝方言は, 他の多くのアムド・チベット語の方言と同様に, 声調による弁別がみられない.

### 5.1 音節構造

音節構造は (C<sub>1</sub>) (C<sub>2</sub>) (C<sub>3</sub>) V (C<sub>4</sub>) と表わすことができる. ( ) 内の要素は必須ではない. 具体的には, 以下の音節構造が可能である. 子音連続は, 2 子音連続 (C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>, C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>) と 3 子音連続 (C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>) が可能である. 母音連続は天祝方言の固有語には認められない. 音節末には子音連続はみられない.

VC<sub>4</sub>とC<sub>1</sub>C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>Vに関しては, 1 音節語の例が得られなかったため, 2 音節語の例を提示する.

V	/ə/	[ə]	「～か? (動詞に前接する疑問接辞)」
VC <sub>4</sub>	/amtɕ <sup>h</sup> ok/	[amtɕ <sup>h</sup> ok]	「家庭を訪問して経を読む僧」
C <sub>2</sub> V	/ɕ <sup>h</sup> ə/	[ɕ <sup>h</sup> ə]	「水」
C <sub>2</sub> VC <sub>4</sub>	/ɕoŋ/	[ <sup>h</sup> ɕōŋ]	「来る」
C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V	/psə/	[p̚sə]	「毛」
C <sub>2</sub> C <sub>3</sub> V	/kwa/	[k <sup>w</sup> Δ]	「命令」
C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> VC <sub>4</sub>	/nt <sup>h</sup> eŋ/	[ <sup>h</sup> nt̚eŋ]	「引っ張る」
C <sub>2</sub> C <sub>3</sub> VC <sub>4</sub>	/ŋwak/	[ŋ <sup>w</sup> Δk]	「派遣する」
C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> C <sub>3</sub> V	/ngwara/	[ <sup>h</sup> g <sup>w</sup> ΔrΔ]	「鉄匠」
C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> C <sub>3</sub> VC <sub>4</sub>	/nk <sup>h</sup> war/	[ <sup>h</sup> nk <sup>w</sup> Δr]	「砦」

<sup>6</sup> この調査は, 日本学術振興会科研費補助金 (基盤研究S) 「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読—」 (研究代表者 長野泰彦, 2004-2008) の一環として行った.

## 5.2 子音の音価

子音音素には 41 音素を設定できる。音素と音声表記は表 2 に示す。表 2 に示す音素は全て C<sub>2</sub> の位置にたつことができる。子音音素の音声的な実現は語内で現れる位置によって変わる場合がある。代表的表記として、語頭位置の C<sub>2</sub> における音価を示すこととする。

閉鎖音と破擦音の全て、摩擦音の一部には、無声無気音、無声有気音、有声音の 3 つの対立がある。有声音は、語頭位置では、前に、軽い有声声門摩擦音 [ʔ] を伴って発音される。

すべての鼻音には有声音と無声音の対立がある。

流音の /r/ は、語頭位置では、前に、軽い母音 [ʔ] を伴う。

表 2 子音音素

	両唇	歯茎	そり舌	歯茎硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖								
無声無気	p [p]	t [t]	t̪ [t̪]			k [k]		
無声有気	p <sup>h</sup> [p <sup>h</sup> ]	t <sup>h</sup> [t <sup>h</sup> ]	t̪ <sup>h</sup> [t̪ <sup>h</sup> ]			k <sup>h</sup> [k <sup>h</sup> ]		
有聲	b [b̥]	d [d̥]	d̪ [d̪̥]			g [g̥]		
破擦								
無声無気		ts [ts]		tʃ [tʃ]				
無声有気		ts <sup>h</sup> [ts <sup>h</sup> ]		tʃ <sup>h</sup> [tʃ <sup>h</sup> ]				
有聲		ɖ [ɖ̥]		ɖʒ [ɖʒ̥]				
摩擦								
無声無気	f [f]	s [s]	ʃ [ʃ]	ç [ç]	ç [çχ]			h [h]
無声有気		s <sup>h</sup> [s <sup>h</sup> ]		ç <sup>h</sup> [ç <sup>h</sup> ]				
有聲		z [z̥]		ʒ [ʒ̥]				ɣ [ɣ̥]
鼻音								
有聲	m [m]	n [n]		ɳ [ɳ]		ŋ [ŋ]		
無聲	m̥ [m̥m]	n̥ [n̥n]		ɳ̥ [ɳ̥ɳ]		ŋ̥ [ŋ̥ŋ]		
流音		l [l]						
		r [r̥]						
接近音	w [w]				j [j]			

チベット文語との対応から述べると、例えば、次のような特徴がみられる。青海省や甘粛省の多くのアムド・チベット語では、文語の *ch* に破擦音 /tʃʰ/ [tʃʰ]<sup>7</sup> が対応する。天祝県で話される天祝方言では、これが摩擦音 /çʰ/ [çʰ] に対応している (馬 1994: 63 にも指摘がある)。例をあげると、*chog* 「してもよい」という語が、/çʰok/ [çʰok], *chu* 「水」は、/çʰə/ [çʰə] と発話される。

子音のうち、末子音 C<sub>4</sub> にたつことができるのは /p/, /t/, /k/, /m/, /n/, /ŋ/, /r/ の7つである。確認した限りでは、末子音 /ŋ/ は前の母音を常に鼻音化する。

### 5.3 子音連続

子音連続は2子音連続と3子音連続が可能である。2子音連続には、C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>とC<sub>2</sub>C<sub>3</sub>という子音連続の組み合わせがある。C<sub>1</sub>およびC<sub>3</sub>の種類はいくつかに決まっている。

#### 5.3.1 2子音連続

2子音連続には、C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>の組み合わせ (§ 5.3.1.1) と C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>の組み合わせ (§ 5.3.1.2) がある。

##### 5.3.1.1 C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>の組み合わせ

今回の調査では、以下のC<sub>1</sub>C<sub>2</sub>の組み合わせが確認できた。C<sub>1</sub>の子音は、/m/, /n/, /p/, /w/, /h/ が可能である。

C<sub>1</sub>の子音 /m/, /n/ は、後続するC<sub>2</sub>が無声音である場合には無声音で実現する。後続するC<sub>2</sub>が有声音の場合には、C<sub>1</sub>の子音 /m/, /n/ も有声音で実現する。C<sub>1</sub>の子音 /m/ は、どの環境でも両唇鼻音で現れるが、C<sub>1</sub>の子音 /n/ は、後続する子音と同じ調音点の鼻音で実現する。

C<sub>1</sub>の子音 /p/ は、唇音で現れる。後続のC<sub>2</sub>は、歯茎音のみを確認した。C<sub>2</sub>が無声音のそり舌閉鎖音 [t] の場合は、/p/ は、軽い無声音の両唇閉鎖音 [p̚] で実現する。後続のC<sub>2</sub>が無声音の摩擦音 (/s/, /ç/) の場合には、C<sub>1</sub>の子音 /p/ は、無声音の両唇摩擦音 [p̚] で実現する。後続のC<sub>2</sub>が有声音の場合 (/d/, /z/, /l/) は、有声音の両唇摩擦音 [β] で実現する。

C<sub>1</sub>の子音 /w/ に後続するC<sub>2</sub>は、/r/ と /z/ のみを確認した。C<sub>2</sub>が /r/ の場合は、C<sub>1</sub>の子音 /w/ は [w] で実現する。C<sub>2</sub>が /z/ の場合は、同一の語においても /w/ の実現に [w], [β], [wβ] の異音がみられた。これらの異音の現れる条件についてはよくわかっていない。

C<sub>1</sub>の子音 /h/ は、後続のC<sub>2</sub>が無声音の場合には無声音 [h̚] で、後続のC<sub>2</sub>が有

<sup>7</sup> アムド方言の一部の遊牧民の言葉では、閉鎖音 /cʰ/ [cʰ] に対応する。

声音の場合には有声音 [ʳ] で実現する。

C<sub>1</sub> C<sub>1</sub>C<sub>2</sub> の組み合わせ

m | /mp<sup>h</sup>/ [m<sup>h</sup>p<sup>h</sup>], /mt<sup>h</sup>/ [m<sup>h</sup>t<sup>h</sup>], /mts<sup>h</sup>/ [m<sup>h</sup>ts<sup>h</sup>], /mtʰ/ [m<sup>h</sup>tʰ], /mtɕ<sup>h</sup>/ [m<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>], /mk<sup>h</sup>/ [m<sup>h</sup>k<sup>h</sup>],  
/mb/ [m<sup>h</sup>b], /mɕ/ [m<sup>h</sup>ɕ], /mɕ/ [m<sup>h</sup>ɕ], /mn/ [m<sup>h</sup>n]

n | /nt<sup>h</sup>/ [n<sup>h</sup>t<sup>h</sup>], /nts<sup>h</sup>/ [n<sup>h</sup>ts<sup>h</sup>], /ntʰ/ [n<sup>h</sup>tʰ], /ntɕ<sup>h</sup>/ [n<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>], /nk<sup>h</sup>/ [n<sup>h</sup>k<sup>h</sup>],  
/nd/ [n<sup>h</sup>d], /nɕ/ [n<sup>h</sup>ɕ], /nd/ [n<sup>h</sup>d], /nɕ/ [n<sup>h</sup>ɕ], /ng/ [n<sup>h</sup>g]

p | /pt/ [p<sup>h</sup>t], /ps/ [p<sup>h</sup>s], /pɕ/ [p<sup>h</sup>ɕ],  
/pd/ [p<sup>h</sup>d], /pz/ [p<sup>h</sup>z], /pl/ [p<sup>h</sup>l]

w | /wr/ [wr], /wz/ [βz]~[wβz]~[wz]

h | /ht/ [h<sup>h</sup>t], /hts/ [h<sup>h</sup>ts], /hs/ [h<sup>h</sup>s], /htʰ/ [h<sup>h</sup>tʰ], /htɕ/ [h<sup>h</sup>tɕ], /hɕ/ [h<sup>h</sup>ɕ], /hk/ [h<sup>h</sup>k],  
/hm/ [h<sup>h</sup>m], /hn/ [h<sup>h</sup>n], /hl/ [h<sup>h</sup>l], /hn̄/ [h<sup>h</sup>n̄], /hj/ [h<sup>h</sup>j], /hŋ/ [h<sup>h</sup>ŋ]

### 5.3.1.2 C<sub>2</sub>C<sub>3</sub> の組み合わせ

C<sub>2</sub>C<sub>3</sub> の組み合わせは、C<sub>3</sub> が /w/ の場合のみを確認した。/tw/, /kw/, /ŋw/, /hw/ が可能である。

### 5.3.2 3子音連続

3子音連続には、/nk<sup>h</sup>w/ と /ngw/ のみを確認した。ともに、C<sub>3</sub> は /w/ である。

## 5.4 母音

母音は以下の7音素が設定できる。単母音のみが可能である。

7つの母音すべてが開音節に現れることができる。閉音節の場合には、/e/, /a/, /o/, /ə/ の4つの音素のみが出現可能である。

開音節の場合の母音の音価を代表として示す。

/i/ [i]	/u/ [u]
/ə/ [ə]	/o/ [o]
/e/ [ɛ]	/a/ [ʌ] /ɔ/ [ɔ]

## おわりに

本稿では、アムド・チベット語天祝方言の言語使用状況と言語に関する先行研究、音韻特徴について報告した。日進月歩で進展する西部大開発の影響と、それに伴う産業構造の変革などの要因によって、天祝方言は今後ますます衰退する恐れがある。Hermanns (1952: 194) や華・馬 (1992: 202) が指摘するように、天祝方言は、伝統的

には遊牧民の言葉<sup>8</sup>に属する。牧畜という生業が重要な基盤となってきたと考えられる天祝方言は、この牧畜生活が変化することにより、言語自体も大きく変わってくるものと予測される。

本稿では、言語の使用状況という社会的な側面を中心に述べてきた。天祝方言自体に関する特徴の記述についてはこれからの課題としたい。今回の報告を端緒とし、今後、天祝方言研究を進めることで、チベットの方言研究およびチベット語の古層についての研究に、何らかの有益な提言を行っていきたい。

## 参考文献

- Dunnell, Ruth W. (1996) *The Great State of White and High — Buddhism and State Formation in Eleventh-Century Xia*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 格桑居冕・格桑央京 (2002) 『藏語方言概論』 民族出版社。
- 国务院人口普查办公室, 国家统计局人口和社会科技统计司 (編) (2002) 『甘肅省 2000 年人口普查資料』 上冊 中国統計出版社。
- Hermanns, Matthias (1952) *Tibetische Dialekte von Amdo*. *Anthropos* 47: 193-202.
- 華侃・馬昂前 (1992) 「藏語天祝話的語音特点及与藏文的対応關係」 『西北民族研究』 1992 年第 1 期 (総第 10 期): 189-203.
- 馬昂前 (1994) *dpa' ris yul skad kyi thun mong ma yin pa'i khyad chos rags tsam gleng ba* (「略析天祝方言的独特風格」) 『西北民族学院学報』 1994 年第 1 期 (総第 20 期): 62-70.
- Prejevalsky, Nikolai (1875) *Mongoliia i strana tangutov' : trekhletnee puteshestvie v' vostochnoi nagornoi Azii*. vol.1. Sanktpeterburg': Izdanie Imperatorskago Russkago Obshchestva.
- 喬高才讓主編 (2004) 『天祝史話』 甘肅文化出版社。
- Wang Xingxian (1998) *dpa' ris sa khul gyi bod rigs tsho ba zhig la rtog zhib byas pa'i snyan zhu*. In: Anne-Marie Blondeau (ed.) *Tibetan mountain deities, their cults and representations: papers presented at a panel of the 7th Seminar of the International Association for Tibetan Studies Graz 1995*, 183-96. Wien: Verlag der Osterreichischen Akademie der Wissenschaften.

---

<sup>8</sup> 天祝方言は、1950 年代の一斉調査の際には「農業区土語群」(農民の言葉) に分類されている(格桑居冕・格桑央京 2002: 173)。ただし、1950 年代頃、この地域にはすでに青海省の農業区の方言話者が移民として大量に入居しており、それによって天祝方言のもともとの体系が大きく影響を受けた後の調査だったことに留意すべきである。一方、標高の高い地域においては、現在でもはっきりと遊牧民の言葉の痕跡が残っており、このこと自体が、天祝方言がもともと遊牧民の言葉であることを如実に示している。

# **dPa' ris Dialect of Tibetan and its Language Use**

Bessho, Yusuke & Ebihara, Shiho

## **Abstract**

dPa' ris Dialect of Tibetan is spoken in Tianzhu county, Gansu Province, China. Tibetan spoken in China can be divided into three major dialects: Central, Kham and Amdo. dPa' ris dialect belongs to Amdo Tibetan. Tianzhu county is situated at the east end of the Qinghai-Tibet highlands, which is why people in Tianzhu county have been subjected to the cultural contact with Han Chinese. People living at low altitudes in particular are subject to the influence of the sinosphere. In this situation, the number of dPa' ris dialect speakers is on a declining trend.

In this note, we will report on the social background which surrounds dPa' ris dialect (1. history and geography of Tianzhu county, 2. ethnic distribution, 3. language use of dPa' ris dialect), and some data on language itself (4. previous work on dPa' ris dialect, 5. phonological description).